

民芸運動の旗手たち —河井寛次郎を中心に

今期は、民芸運動の中心を担った河井寛次郎(1890-1966)の没後50年を前に、当館の工芸コレクションから、河井寛次郎、富本憲吉、パーナード・リーチ、浜田庄司、芹沢銈介、黒田辰秋、宗廣力三、志村ふくみ、渡辺溥子の陶磁・漆工・染織の作品群により民芸の思想が育てた工芸の世界を紹介します。

民芸は大正末期より柳宗悦らによって提唱された造語で、民衆的工芸の略称です。その思想は、機械化や工業化が急速に進んでいた時代に、手仕事の大切さ・日用雑器に潜む美を再認識させる民芸運動へと発展しました。そして、やきもの、織りもの、染めもの、うるし、木や竹などの素材・伝統に則った技法・各地の美意識を再構築したさまざまな様式へと展開しました。

柳は、民芸思想の普及のために雑誌『工藝』を発行し、1931(昭和6)年1月に創刊、1951(昭和26)年1月に終刊するまで120号を発行しました。1943(昭和18)年までは月刊、その後は社会情勢もあって不定期となり、1946(昭和21)年まで3年間発行停止し、戦後になって6巻を発行しました。柳は、雑誌そのものを工芸品として作ることを目指したため、内容はもちろんのこと、素材やデザインを極めて重視した。装幀は民芸運動に賛同した作家たち—芹沢銈介を筆頭に—によって制作され、表紙の素材は手引き・手織り・草木染めの木綿布や葛布、和紙を用い、本文用紙も可能な限り手漉き和紙を採用するなど、細部まで心を尽くした作りとなっています。120冊の豪華な装幀をお楽しみください。



『工藝』表紙 型染装幀：芹沢銈介 1931(昭和6)年

河井寛次郎(1890・明治23-1966・昭和41)は、島根県安来市生まれ。1914(大正3)年に東京高等学校窯業科を卒業したのち、京都市立陶磁器試験場で研究を重ね、1916(大正5)年に京都の五条坂に鐘溪窯を開きました。初期は、



河井寛次郎《辰砂菱花食籠》

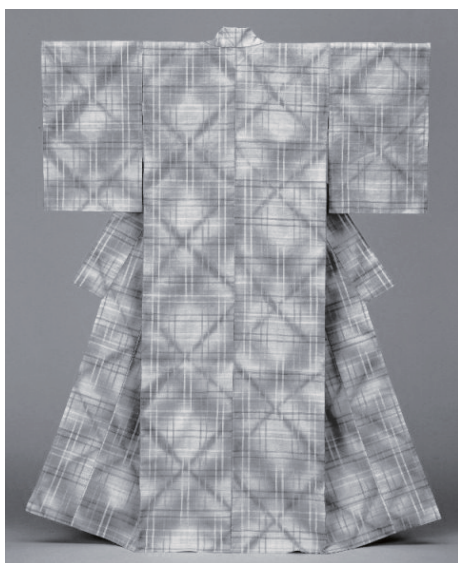
青磁や辰砂など中国や朝鮮の古陶磁の技術を駆使した作品で高い評価を得ました。大正末期からは、柳宗悦や浜田庄司たちと民芸の道を志し、中心的役割を果たし、その後の創作活動では自由で新しい表現を求めつづけ、自己の赴くままの境地をあらわしました。

芹沢銈介(1895・明治28-1984・昭和59)は静岡市生まれ。東京高等工業学校図案科を卒業後、琉球紅型の美しさに傾倒し、研究の結果、独自の型染を完成させました。また、柳宗悦の民芸思想に共鳴して、1931(昭和6)年創刊の雑誌『工藝』の表紙制作を契機に制作者として民芸運動に参加しました。独特の装飾文字、卓抜したデザイン感覚と色使いが印象的である。1956(昭和31)年、重要無形文化財〈型絵染〉保持者に認定されました。



芹沢銈介《紙を造る人》(部分) 1950(昭和25)年

宗廣力三(大正元・1912-昭和64・1989)は、岐阜県郡上郡生まれ。昭和27(1952)年に郡上郷土芸術研究所を設置し郡上紬の研究・生産を開始しました。3年後には京都に河井寛次郎を訪ねて、師事。昭和57年(1982)、重要無形文化財〈紬縞織・緋織〉保持者に認定されました。日本各地に存在した伝統的な緋や紬の世界に創意を持ち込み、現代工芸としての芸術性を引き出しました。様々な技法の開拓にも熱心で、「どぼんこ染」もそのひとつです。



宗廣力三《茜茶ほぐしどぼんこ染緋着物》1985(昭和60)年

民芸の思想を糧にして、優れた美意識と高い技術を自家薬籠中のものとした作家たちの個性が羽ばたいた世界を楽しんでいただければ幸いです。

当館主任学芸員
福田 浩子